

京都市基本計画審議会 第1回すこやか部会
摘 録

日 時：平成21年10月29日（木）17:00～19:05

会 場：子育て支援センターこどもみらい館 4階第1研修室

出席者：

| | | | |
|------|------|--------|----------------------------|
| あらまき | あつこ | 荒牧 敦子 | 社団法人認知症の人と家族の会京都府支部代表 |
| おおまえ | えみ | 大前 絵美 | 公募委員 |
| かとう | ひろし | 加藤 博史 | 龍谷大学短期大学部社会福祉科教授 |
| しげた | まさこ | 繁田 正子 | 京都府立医科大学大学院医学研究科地域保健医療疫学講師 |
| すがはら | こ | 菅原 さと子 | 社団法人京都市私立幼稚園協会前副会長 |
| たけした | よしき | 竹下 義樹 | 社団法人京都市身体障害者団体連合会副会長，弁護士 |
| たなか | せいじ | 田中 誠二 | 学校法人大和学園学園長 |
| ながや | ひろひさ | 長屋 博久 | 京都市PTA連絡協議会前副会長 |
| にしおか | しょうこ | 西岡 正子 | 佛教大学四条センター所長・教育学部教育学科教授 |
| にしわき | えつこ | 西脇 悦子 | 京都市地域女性連合会会長 |
| はら | たけし | 原 健 | 社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長 |
| もとむら | てつろう | 本村 哲朗 | 公募委員 |
| もり | よういち | ◎森 洋一 | 社団法人京都府医師会会長 |
| やまうち | いほこ | 山内 五百子 | 社団法人京都市保育園連盟常任理事 |

以上14名

◎…部会長

(50音順，敬称略)

1 開会

2 部会長あいさつ

森部会長

京都府医師会長を務めている。保健，福祉，教育について意見をいただき，多くの市民と共汗・共感できる方向でまとめていきたい。京都市は財政難にあるため，できればお金のかからない画期的なアイデアが出ればいいかと思っている。

3 議事

(1) 副部会長の指名

森部会長

議題に移り，副会長を指名する。見識，経験ともに豊かな西岡委員にお願いしたい。

—— (西岡委員，副部会長席へ移動) ——

西岡副部会長

学校教育や社会教育について，京都市は他都市に比べて優れていると思っているが，今後の10年は他都市との比較ではなくて，世界で1番というところを目指して考えていきたい。

(2) 共汗部会の役割や次期京都市基本計画の構成等について

事務局から以下の資料を説明

- ・資料1 審議会の全体構成と共汗部会の役割について
- ・資料2 次期京都市基本計画の構成について
- ・資料3 分野別方針記載項目(案)
- ・資料3 別紙 政策-施策の仮体系(案)
- ・資料4 共汗部会の運営について(案) <すこやか部会>

森部会長

駆け足で御説明いただいたが，今後はほぼ毎月何らかの会議を行い，来年11月に答申案を出していくのでよろしく願います。この部会では，子育て支援・保健医療，学校教育・生涯学習，高齢者福祉・障害者福祉・地域福祉をテーマに第2回から第4回までの部会を開催していこうと計画されており，我々としてもこれくらいがこの部会で取り扱う範囲だと思うが，御意見をいただきながらまとめていきたい。

本日は第1回でもあり，このテーマについて付け加えるべきものがあるなど，御意見があれば願います。分野横断的な面も出てくるのでこれに縛られる必要はないかと思うが，現状はこれで進めてさせていただく。

(3) 意見交換

森部会長

第2回から第4回のテーマに沿って，意見をお伺いしたい。

2回目は子育て支援・保健医療がテーマだが，御承知のように京都市は合計特殊出生率が全国と比べて低いところである。学生の多さがその理由とされているが，現状低いのは間違いのないため，活性化のために，少子高齢化対策は大きな課題である。保健医療については，京都市は市立病院を中心に，新型インフルエンザの猛威に春からずっと頑

張っていただいている。今後の医療体制や健康増進について、御検討いただきたい。

山内委員

子育てに親が関わる部分は非常に大切だが、隣近所とか地域での親育ちに当たる部分はなかなか機会がない。京都市でも親支援のプログラムを進められているが、もう少し強化して、地域も含めた親育ちのようなプログラムができればと考えている。

森部会長

地域の関わりが低下しており、その部分は非常に大切だ。少子化で孫が少なく元気なお年寄りが子どもを構い過ぎて、孫離れできない場合もあり、親育ちだけではなく祖父母育ちまで考える時代になってしまっていると感じる。

西脇委員

地域の絆が希薄化しているので、解決するため子育て支援とともに親育ち支援をしている。子育て中のお母さんは忙しくなかなか御参加がないが、私たち世代が発信すべきと考えている。構い過ぎたらお節介になるが、緩やかにすると小学生のお母さん方ですら、なかなか地域と関わっていただく機会がない。こうした方たちをいかに誘って地域づくりをするか、皆さんと議論していい方向に行けばと考えている。

森部会長

共働き家庭の子育ては厳しい状況になっていて、さらに地域の関わりを求めると避けられる部分もあるだろう。人手不足や待機児童の問題もあるだろうが、保育所で祖父母世代の声を生かすような方策もあるのかなと思う。行政でやるのか、NPO等でやるのかはあるが、そういう場があれば共働きでない方々のつながりができると思う。

西岡副部長

子育てに関しては母親にスポットが当たるが、父親の子育て参加も重要。学校の先生も朝7時に来て夜11時に帰るセブンイレブンといわれる実態がある。融合委員会とも関わってくるものと思うが、京都市は両親揃って子育てができるようになればいい。

大前委員

私の妊娠時、府外から転入された母親がたくさんいて、保健所の取組で交流が生まれ、京都でともに育児ができたらいねと話していた。しかし、子どもが1歳ぐらいになったら、手狭なアパートから大津や向日市に引っ越され、つながりが切れ寂しく思った。

夫の転勤が京都だから一緒についてきたという方がいるほど、京都は魅力のあるまちだが、子育てをするには、地域のつながりがうすく、定住するには厳しいところがある。私の子どもが去年に大病のため保育園を一度やめたが、地域や保育園の方々の協力で、再度4月から入ることができた。地域のつながりの大切さを発信できればと思っている。

菅原委員

若い母親の間に、姑からの意見は聞けないが、同じ世代である私など第三者的な立場の人の話は素直に聞けるという不思議な部分がある。第三者的な立場からの意見は、実際に（孫育てに）関わっておられる祖父母の立場からも大切だと思う。

私立幼稚園の場合は通ってくる地域が広範囲だが、園に通う方が自分の園で育ててくださることが地域と受け取っている。公立小学校での受入れや幼稚園自身が学校としての位置付け、そして今は幼稚園にも子育て支援として、延長保育や子育て保育をしてい

るところもあるので、そういったすべてを上手く網羅していくことが大切である。

田中委員

基本計画策定に当たっては、戦略的な目標、構想を持って子育てなどの個々の政策を柱立てする必要がある。都市経営を考えるうえで、京都市としては子どもの少なさが一番の課題であり、ある種環境が整っていないために更なる少子化を生む現象があるならば、非常に大きな戦略的課題である。

例えば、若い既婚カップルの他近隣府県への流出率を統計的に洗い出して目標を設定したり、合計特殊出生率を上げるといった指標を設定し、単年度ごとに着実に達成していくような仕組みづくりが必要であり、財政が大変な中、市民と行政が共汗しながら、計画の策定だけでなく実践すべきである。

また、生活習慣病関連の医療費の削減も課題である。京都市民の健康づくりについては、京都市独自にすばらしいプランを立てられているが、世界の都市間の中でも京都市が一番になるには、健康寿命の延伸について、市内の統計をしっかりと取って、パリやニューヨークなどの世界の他都市と比べても素晴らしい長寿環境都市であるといえるような基本構想ができればよいと思う。

森部会長

若い人たちが、子どもが成長されると流出する傾向に対して、流出しない・流入してもらう都市にするということが、少子化対策の一つの目標として大切である。

京都市は魅力的であるが、他府県から来られた方が長く住めるか、また、若い人が子育てをしながら住める環境にあるのか、ということを考える必要がある。

加藤委員

「育児不安」という言葉があるのは日本だけだと言われている。それだけ子育てをする母親が孤立している。人間はすべて群れの存在であり、群れから外れて人間というのはあり得ない。子育てサロンみたいな子育て支援のあり方に、いかに工夫し特色を出していくかがポイントになる。

その一つが、共働きの親を意識した親の出会いの場だろう。もう一つは誘い方のシステムだ。積極的な母親は仲間同士で子育て支援サークルをつくったりするが、孤立している人は落とし穴にはまったようになっている。さらに、これらに地域の力をどうクロスさせていくか。これら三つのポイントで京都らしいものが打ち出せたらいいと思う。

荒牧委員

子育てと高齢者の支援はリンクできる。認知症の方の介護家族と子育ての親を孤立させないことは同じ意味合いを持っている。高齢者に対する地域のサロン活動が活発だが、子育てと高齢者のサロンを分けて考えず、一体化を図る。

子どもも認知症の方も社会的弱者であり、社会的弱者を支える方々のサロン活動を、地域で点から線、面へと広げていくことがこれからの10年のあり方だと考える。

繁田委員

共働きで京都出身でもないが、京都にきて息子2人を育てて、レベルが非常に高い教育、地縁を生かした素晴らしい保育に大変満足した。ただ、どこかしら地域には入りにくい。やはりお客さんだったのか。子どもが大きくなると地域との関係がなくなる、

児童館や保育所が増えれば、母親が孤立しないということにはならない。母親の心理は微妙で、お節介してほしい、でもしてほしくない、など、両面性があり、そこに応え

ることが求められる。子育ては原始的な複雑なものである。

一面的なワンプレーズの計画にしてほしくない。単に母親が大事だ、保育園が大事だ、だけではすまない。京都市の中学校へも多く行っているが、状況は学校によってまったく違う。メンタルな面に触れるのは難しいが、この委員会でそのレベルを達成したい。

森部会長

先ほど田中委員からあった、生活習慣病対策による医療費の削減、他都市との健康寿命の関係については、次回の第2回の部会に出していただけたらと思う。ただし、疾病予防などは大切だが、長い目でみれば医療費の削減にはならないというデータもある。むしろ、健康で生活できることが人間にとって幸せだ、という方向で考えたい。

京都市は、医療については満足できるレベルにあると思うが、保健についてはいろいろお考えがあるだろう。

繁田委員

私は、たばこ対策で30校回っている。健康寿命を延ばし、血管の病気やがんを減らすには、たばこ対策に尽きる。これまでの日本は、食事や運動は重視するもののたばこに触れてこなかった。心筋梗塞や脳梗塞のエビデンスでは、受動喫煙によって極端に増えている。他国では建物内は禁煙になっており、それにより心筋梗塞が2割、3割減るという素晴らしい成果が出ているにもかかわらず、日本ではできていない。

国の法律制定は難しいが自治体ではできる。神奈川県知事が建物内受動喫煙防止条例を3月に作られた。厚生労働省の生活基礎調査において、京都市は男性喫煙率が政令指定都市の中で一番低い。禁煙対策はすぐできそうであり、子どもたちが吸わないように市の教育委員会が熱心に取り組んでいるので、たばこ対策をこの部会の目玉にしたい。

森部会長

医師会の申し入れにより、京都のタクシーの禁煙も実現し、少しずつ進んでいると思う。たばこ対策は当然一つのテーマになるが、健康教育は学校教育とも関連してくる。

田中委員、その辺りで御意見はありますか。

田中委員

保健指導の中で一番難しい行動変容が喫煙指導という意見がある。京都・大阪のミッシュランガイドも創刊されて、情報が閉ざされがちな京都料理界が外圧により白日の下にさらされた。が、欧米に比べ、ホテルやレストランで禁煙のところが少ない。

市条例として10年間で具体的に着手するなど、一歩踏み込んだ取組をするべき。京都市の品格、都市格の中で禁煙対策がなされていないというのは考えられない。景観の条例は世界でも素晴らしい条例を作られたので、健康対策でも踏み込めたらと思う。

西岡副部会長

私もたばこが嫌いで禁煙の方向にあって幸せ。大学でも禁煙教育をしており、教職員研修会でデータを見た。生涯学習を含めて様々な分野から進めて条例ができればいい。

荒牧委員

たばこについて、私が気にしている現象として、施設の中で働く人に意外に喫煙者が多いという現状がある。外に出て吸うなど気は遣われているが、例えば、福祉会館で福祉関係の研修があるとき、外にたむろして吸っている方が多いのが気になっている。

また、生活習慣病に関しては、認知症対策としても非常に重要だと考えている。

森部会長

生活習慣病対策で御意見はないか。普段から運動する習慣をつけることが大切。運動されている方は増えたが、医学的に正しい運動をされているかが気になる点である。

加藤委員

生活習慣病なのか微妙だが、うつ病が非常に増えてきており、診療所の先生も実感されている。どこに原因があるかという点、自殺の増加も同じだが、一つは人間が脆くなってきていること。ストレス耐性という点、悲しみや苦しみをいっぱい体験しつつ成長することがなくなってきているのか。

もう一つは、生活の中で気楽に相談できる人が減ったことが原因と言われている。そういうことへの仕掛けも押さえる必要がある。

森部会長

京都は自殺の増加率が全国トップクラスとなった。データを集めて早急に対策を練るべき。全国的に産業医の分野でメンタルヘルスが大きな問題となっている。運動することが対策とも言われているのでモデル的な生活習慣を提示することも一つの手だと思う。

山内委員

子どもたちが色々な面でひ弱になっていると感じるときがある。心の健康という意味で、小さいうちの自然体験が減っている。普段転んだらすぐ薬を塗ってもらう子ども、自然の中では、すぐに立ち上がる。市内で手軽に自然の中に入っていける環境をもう少し作るべきである。市内にある公園でも遊具に欠陥があるとすぐに撤去される。そういう対応では子どもたちはたくましくならない。京都市の保育園では八瀬野外保育センターを持ち、手軽に体験ができる。データの他都市との比較が分からないが、京都市は少ないと思うので、自然の中で体験できる環境を作っていくことが今後は大事だと思う。

森部会長

左京と右京には非常に広い自然のエリアがあるが、行くまでに時間がかかるのが課題。

本村委員

生活習慣病について、私たちの親の世代は、高度成長期を牽引された方々だが、昔ながらの日本食を食べられており、非常に太った方はそれほどいなかったという印象がある。今の子どもたちはファーストフードや肉、脂質を取りすぎている。世界に誇る食文化、昔ながらの食を京都から発信して生活習慣病にも対策できればと思う。

森部会長

次は、学校教育・生涯学習について、御意見をいただきたい。

長屋委員

現役の子育て世代ということで子育ても含めてお話しさせていただく。毎日非常に忙しく、意識はあっても地域に関わることができない。その背景の一つとしては、きっかけが作りにくいことがある。その本質的な部分には、我々の世代は自分たちの家族が最優先で、その次が地域となってしまっていることがあると思う。

その対策として、今後10年を考えると我々の世代だけでなく、子どもたちが自然と地域に入れるような環境をつくり、彼らが親となったときに今とは違う地域をつくれるような土台づくりが大切であり、そのためには教育が重要である。また、大学生やこれ

から親となる世代に子育てのよさを伝えるとともに、子どもたちに勉強の大切さだけでなく、人間としての楽しみを知ってもらうことが必要である。

また、遊び環境として、毎月16日をノーゲーム、ノー携帯デーとしてPTAで取り組んでいる。単に奪うだけでなく、これまでとは違う楽しみを家庭で発見してほしいという思いで取り組んでいるが、気軽に遊べるような公園がなく、身近で遊べる環境づくりも並行してやっていただきたい。

森部会長

公園で野球をするとうるさいというクレームが入ると聞くこともある。京都市でそういう資料があればいただきたい。地域に入っていきたいが入っていけないのは、京都にずっとおられる方でもそうなのか。よそから入って来られた方が、お付き合いしにくいところという意味なのか微妙だが、やはりコミュニケーションだけの問題ですか。

長屋委員

コミュニケーションがとりにくいのです。

森部会長

看護学校をやっているが、実習で患者さんとしゃべれず、挫折してしまう問題がある。

加藤委員

今の子どもたちに不自由が足りないということが言われる。生活体験をもっと考えていく必要があるのではないか。例えば姉妹都市があるが、町内レベルで過疎村などと子ども参加で付き合っていく。過疎地域の問題とも関連して一つのアイデアだと思う。

高齢者との交流は、何よりも一緒に食事をするのが大切であり教育に取り入れる。

また、死というものが我々の生活から排除され、一方でゲーム脳が作られている。死に出会う、看取るということを教育に位置づけることが大事である。プログラムされたものを与えられる、そんな教育ばかりになってしまっていることが一番の問題である。

菅原委員

飽食の中で、子どもたちは自分がどれだけ食べられるのかという認識がない。私たちの時代ではご飯粒を残さないが、おなかがいっぱいになればもういいという感覚が母親にもある。子どもが食事をなかなか食べないという相談を受けるが、お皿に山盛りにしていませんかと話をしている。小さいときから、食べ終わったらお代わりをいただけるということを体得できる状況を母親に発信していくべきと思う。

森部会長

小児科医として耳が痛い。お母さんからの「子どもが御飯を食べない」という相談に「食べるまで縛り付けていないか」と聞くと「そうだ」と答える。そこその量でお代わりをして必要な分だけ食べる。食の都ですから、その辺も考えないといけない。

西岡副部会長

生涯学習センターで死についての講座をすると、多くの人が集まる。生涯学習の中でも死に対して疎遠になっている中で、大人にも死の教育が必要である。

京都でありがたいのは様々なところが連携が取れているところ。女性会と大学生をはじめ、公立小学校へ大学生が入って授業をさせていただいたり、高齢者とも交流できたり、様々な団体と学校教育、社会教育との連携が取れる。今後もどんどんこれを進めていただき、バリアを取り除くような形であってほしい。

大前委員

死については、小さい子が簡単に「あっ、死んだ。」などの言葉を発する。子どもが2歳、3歳のころからゲームをおぼえる。父親がゲームをして、一緒に遊んでいることが一つの原因だと思う。

また、同じ京都市内でも「私は〇〇学区に住んでいる。」というブランド意識を持っている地域がある。例えば、人気のある小学校がある一方で、人が少ない小学校がある。マンションが建って児童が増えると期待しても、人気のある学区に行ってしまう。

各学区の特色を受け入れ、私たちが将来の子どもたちのために、実際どうすれば役に立つかということが課題だと考えている。

森部会長

おっしゃっている課題は本当に重く京都にはある。取り組んでいかないといけない。

田中委員

食育基本法については、現行計画にはない視点であり、学校教育の中で取り組むべき。京都市はすでに産学公で取り組んでいる都市であり、学校で地域と連携した取組をしているモデル都市といえる。生命に対する尊厳は、食べ物を大切にしないなかからも学ぶことができる。規範教育の一環として地域が連携することが必要だと思う。

また、最近、おゆとり様という言葉を目にした。おゆとり様は困難な問題に対峙するのではなく、草食系というか身の丈にあった生活をするゆとり教育世代の方を指すそうである。それも大切だとは思いますが、ヒーローにあこがれる、自分で道を切り開くということを目指すような、夢のあるひとつづくりが学校教育の中でできればと思う。

繁田委員

ゲーム脳や個人主義の話が出たが、京都には任天堂がある。ハイテクの分野を持ちながらも、その負の面を考える部会になる必要がある。高価なものが売れば景気がよくなる一方、健康によいのかという面がある。そこは他の部会ではなく、この部会で検討しなければならない。レベルの高い教育や保育がある一方で、ドアを閉めることもできないような学校もある。そういう格差をどうにかする必要がある。

また、私自身子どもの遊び場所に苦労した。子どもたちだけで安全に遊ばせられる場所は15年前でも皆無に近い。遊具はなくてよいので、転げ回って遊べる場所が少ない。近所のおじさんやおばさんの目も届かない危ない場所も多い。

アメリカにいたこともあるが、地域の人が朝から夕方まで預かってくれたり、少しはお金をもらっているのだと思うが、ボランティアで遊ばせてくれる。京都にはYMCAなどがあるが、高いお金を払わなければ行かせられない。

京都は大学のまちでもある。先日の学生祭典で子どもと幸せそうに遊ぶ大学生を見た。少子化対策にもなると思うので、子育ての場所づくりを検討したい。高齢者よりややゲーム脳の大学生と遊べる場所があれば、子育てしやすい京都というブランドが現れる。

森部会長

意外におじいちゃん、おばあちゃんの昔遊びも子どもは新鮮で喜んではいる。

繁田委員

喜んではおおり、時々はとて面白い。

原委員

京都市社会福祉協議会がどういう仕事をしているか知られていない。社協という略称で地域福祉の中で中核的な組織として各学区に設置されており、隣近所が助け合い、幸せになろうという共助活動を一生懸命努力している組織です。

未来の京都創造研究会の報告書の中で、公助・共助・自助の現状認識が述べられているが、社協としてはこれに対して言い分がある。

私は、学校のPTAの役員をやっているピンと来ないが、社協の会長をしていると子育てで非常に苦労されている現実がわかる。私は正しいことは毅然たる態度で堂々とももの言える子どもをつくっていただきたいと言っている。

自助の拡大という言葉があるが、子どもの問題など個人で解決できない問題が多くなっている。また、公助についても終わったとは思っておらず、共助についても私たちが学校・行政・市が三者一体で努力してきたにも関わらず、薄れてきたと評価され情けない。そういうこともこの部会の中で、社協は皆さん方が主張される問題を十分取り入れて頑張っていく組織と認識を持っていただきたい。

西脇委員

受け手も発信する方も一生懸命やっている。これがどうしたらつながっていくのかがこれから10年の課題。地域での催しに一生懸命誘っても、若い親はさっさと子どもたちを連れてどこかに行ってしまう。なぜ参加してもらえないのか。

お金の要らない昔遊びは子どもたちに争いだけでなく、辛抱を学ばせることができる。

女性会では、子育てに困っている方などが寄っていただける拠点や3世代交流の活動をしている。地域で発信するときに若いお母さんも参加意識を持って地域に関わってもらえればと思う。

現在の子どもは本を読まなくなっており、本を読む機会が学校であれば、夢を見る子どもたちも増えていくと思う。

森部会長

学校教育での子どもの読書はずいぶん進んできたと思う。時間の都合で生涯学習にまで議論が至らなかったが、また第3回部会でご意見を頂戴したい。最後に高齢者福祉・障害者福祉・地域福祉について、お聞きしたい。竹下委員さん、是非一言お願いします。

竹下委員

京都市基本構想の策定にも参加した。そのときのつながりから思うこととして、まず、福祉全般を考えるとときに高齢者、障害者、地域それぞれの福祉が別々に語られることへの違和感がある。もう一つは、京都市自身は高齢者福祉、障害者福祉を全国的にも頑張っているとは思いますが、独自性あるロマンを持った何かを打ち出せないかと思っている。

ノーマライゼーションと言われ、言葉自身は日本にも定着したと思う。しかし、30年、50年前と同じ姿を思い描いても仕方がなく、その時代に合わせて作ることが大切。

子どもたちが障害のある人をどう見るかということについて、学校教育でもそうだが、日常当たり前にいるということを意識的にすることで別枠の話ではないことにつながる。福祉を独立したテーマとして取り上げなくとも実現する仕組みが考えられないか。

次に、私自身は、現在、障害者自立支援法の廃止後に関する協議を厚生労働省から持ち掛けられている。廃止後の国の動きは分からないが、この機会に地域の独自性を大いに京都が打ち出せばよいと思う。そういう夢のある議論がしてみたい。

森部会長

この部会の方向性だろう、いいお話をしていただいた。個別独立した福祉ではなくて、それぞれの人がどういうつながりのなかで、社会で生活していけるか。その生活のしやすさに結びつくよう、すべてが横断的に連携できることを考えていくべきだろう。

加藤委員

いくつかお話したい。まず1点目は、障害のある方の働く場が焦点である。働く場、内容をどう創造していくのか。賃金労働だけでなく、表現するということも働くことに含めてよいと思う。そのためには企業等とのコラボが必要である。

2点目は、障害者が通所施設と自宅の行き来だけにとどまり、地域で見えない。地域デビューを意図的に進めていく必要がある、例えば自治会の役を受けてもらうとか。サポートがあればできるはずである。

3点目は、知的障害者の生涯学習の機会が極端に少ないことである。知的障害者の方は養護学校から出れば学ぶ場がなくなってしまう、これについても考える必要がある。

4点目は、インクルーシブ・コミュニティ、たった一人も排除しない、すべての人を包摂すると言う観点から、外国人、多文化共生についても考えなければならない。そのためには、日本文化をきっちり勉強することが必要で、京都にはすばらしい文化がある。これをもっともっと戦略的に位置づけていく必要がある。

森部会長

たくさんの宿題をいただいた。確かに多文化共生という言葉はいいが、日本人が日本の文化を知らなさすぎる。学校教育・生涯学習の中でも含めていけるとよい。

荒牧委員

高齢者福祉に関しては、介護保険制度が始まったことにより、振り落とされている人が出てきている。制度に入らない人は支援されない。その隙間にある人をどう自治体として救い上げるか、セーフティネットを含めて考える必要がある。私たちも努力するが、公助もやはり必要である。

繁田委員

支援学校の人にはたばこを吸わないと思われているとしたら大間違い。非常に素直なため、職場の人に勧められると吸ってしまう。何とか就職して一番に覚えてきたことがたばこという問題がある。

それから、肥満の問題。メタボの人が多。ジャンキーフードにはまりやすく、カモにしている社会状況があるため自助だけでは限界がある。

養護の先生方も悪い人にだまされるなどと言う教育、ノーと言うスキルを学ばせる必要があると話している。認知症の方へのオレオレ詐欺など、社会のせこさ、いやらしさが前面に出てくる中でこそ、京都はワンレベル高い福祉の提言ができればと思う。

長屋委員

京都には「子どもを共に育む市民憲章」がある。これはノーマライゼーションの考え方をベースに人を子どもとともに育むことが書かれている。

総合支援学校の先生方と話す、仕事についてのニーズとキャパが合っていないという問題、障害者が働く場の問題があると感じる。

また、学習障害も含めこれまでになかった障害が増えてくる中、10年後を考えると新たな障害が出てくる可能性がある。市民一人ひとりが行動できる地盤づくりが必要。

荒牧委員

認知症については、若年性の認知症も問題になっている。京都府の推進委員会でこの問題を取り上げると、「私たちは高齢者の問題を考えている。」と言われる。若年性の認知症の方たちは数が少ないために見捨てられている。この方たちをどこで考えるのかを教えていただきたい。

本村委員

教育の話になるが、ここ7、8年ほど、横浜から中学生の修学旅行での体験学習を受け入れている。来た子どもはおばあちゃん家に来たようだとはいっている。しかし、よく笑い話として魚が切り身で泳いでいると思っていると言う話があるが、玄米御飯を出すと、子どもたちが何という種類のお米かと毎年質問してくる。農家の方にこの話をするとうちに連れて来いと言われる。知識も大切だが、農家が畑で教えてくれることにもつながるので、食育でそういうことができればと思う。

大前委員

障害者のことで、以前と比べれば障害のある子どもたちが外に出る機会は増えたと思うが、ダウン症の子を持つ人がおり、できれば一般の保育園に入りたいのだが難しいと話している。お願いになるが、看護師がいることで安心できる面もあると感じた。

介護保険制度が職員への待遇が良くなるよう改正されたが、これまでの施設の赤字を埋めるために終わり、職員の状況改善までには至っていない実情がある。

障害者、高齢者には体が大きな方もおられるので、介護には男性の力も必要である。昨年経済状況の悪さからリストラされた方が来られるのではという期待もあったが、施設としては景気が良くなったらすぐにやめられるのではという懸念のため、雇用までには結びつかなかった。また報酬が少ないために家族を養えないなどの現状があり、特に男性には厳しい。

高齢者については、介護保険で改善された面もあると思うが、障害者の面では改善すべき点があると感じる。一部ではあるが、知的障害者をストレスのはけ口にする職員もいる。障害者に対する職員の在り方を勉強する必要がある。

森部会長

介護の部分は非常に問題が多く、今回のアップも、離職率が低いところをアップして、離職率の高いところにはいかない形になっている。なぜみな辞めていくかということも基本的に考えないといけない。国の施策は非常に悪いというのはそのとおりだと思う。

また、障害のある子どものリハビリ施設が京都は非常に少ない。できるだけのことを計画に取り入れながらやっていきたい。

原委員

区社会福祉協議会として施設の運営が任されているのは全国のうち、右京区だけである。働く職員は知的障害者の方に御飯を食べさせ、こぼした御飯を自分が食べ、また食べさせている。こういう姿を見ると涙が出てくるが、極めて待遇が悪い中、そういう職員が大勢いることを認識していただきたい。

山内委員

病気や障害のある子どもへの保育園の対応については、現場では悪戦苦闘しながらも頑張っている。一人の子どもをずっと追いかけている職員もいる。病気に関しても、努力はしているが、京都市も苦しく看護の職員が入ることができないが、子どもたちを安

心して預けられる保育園になっていきたい。

集団生活ができない子が増えているというのも事実だが、ぎりぎりの線で職員も一生懸命に頑張っている現実があるので、ひと言お話しておきたい。

荒牧委員

中京区の方が徘徊で行方不明になり、4日目に摂津市で見つかった。GPSを持っているのだが1日目で電池が切れた。その間警察は4箇所で見場所を察知しているのに現場に急行していない。機器だけでなく、やはり地域のネットワークが大切。大阪府の社協の方に対応していただき、発見していただいた。一箇所、一組織ではネットワークとして機能しない。そういうネットワークの構築が必要である。

森部会長

たくさん御意見をいただいた。事務局は今後の部会に生かしていただきたい。汗をかくだけでなく、お金が必要なことも出てきそうだが、よろしく願います。事務局から連絡事項があれば願います。

○ 事務局から日程表の提出依頼及び第1回融合委員会出席者への説明について連絡

4 閉会